

た。そして二十年八月二十日午後二時に樺太農業会のトラックが倉庫に残された農機具を北海道に送るのに漁船を雇ったので家族を、その密航船で行くので大急ぎで若干の衣類と食糧を持たせて、二十一日午後一時半に、迎えに来たトラックに乗せて大泊から北海道への密航の旅に立たせた。

それから翌日ソ連機二機が豊原を襲い。無差別に爆弾投下、焼夷弾、機銃掃射と、長い時間感じたが、それは一時間くらいであっただろう。この空襲で火の手は各所から発生し、ただ防空壕でソ連機の去るのを念じるばかりであった。

このときの空襲で私の家も一瞬に焼失したので、市街の南端の大沢に土地を求めて疎開小屋を建ててあったので、その小屋に行つて夜を明かそうと思つて行つたが、市街が焼ける火の手は天を焦がすかのように染めて、それに、ときどき何かが爆発する地面もゆるがす轟音にとでもその小屋におられず、焼けて独特の異臭と煙がまだ残っている焼跡に立って子供等が遊んだ頑具の原型を止めない残骸を見たときは胸が痛くなった。やがて樺太農

業会の諸設備も残った職員も夫々徴用された私はソ連民政局の命で農産物供出局に徴用されて、アリモフ司令官と大津長官との連名の命令書を持って馬齢薯と燕麥を全島各農業会と町村長宛に手交すべく、各地を回つたが、交通の便が全く乱れ、敷香から南下して馬群にはいった頃はもう真暗くなりソ連の検問隊に銃を持つソ連兵が二人いるところを通り越したときはもうこれが最後だと思つた事も再三であった。

そんな過程をへて今日まで行き永らえたことは奇跡のような気がする。

ポンポン船で密航

北海道 高畑 宏

樺太で生れ豊原市で終戦を迎えた私の八月十五日は、豊原工業学校に在学していた。正午に玉音放送があるというので、全員が講堂に集められました。

雑音がひどくラジオから流れる終戦の詔勅は、内容が

良く分からなかった。日本が降伏したのだと説明され、誰もが無言であったのを覚えている。

ここから私の敗戦の歴史が始まった。当時故郷の我家には電話がついていなかったので連絡のとりようがなかった。実家（大泊郡知床村字弥満）に一端帰って相談しようと大泊へ出たのが二十二日だった。昼頃大泊に着いて北の空を見上げたら黒煙が上がっているのに気付いた。

あとで分かったことだがこれは豊原がソ連の空軍機に爆撃されたのだった。なぜ終戦になってからこのようなことが起こったのか、今だに分からない。

大泊からの引揚船に乗船すべく準備をしている婦女子の姿が街中にあふれていた。船が足りず乗船し切れないのである。母親等は背中と前とに子供をくくりつけ両手に荷物ともう一人の子供をつれている。

この引揚船も八月二十四日で打切りとなった。ソ連軍が進駐して来たからである。乗船出来なかった人々はまた逆戻りを余儀なくされさぞかし大変なことだったと思います。

漸くして帰村したものの、日本に行くのには残る道は密航船を利用するしかなかった。大人一人当時の金で二百〇三百円といわれていた。命をかけてわざわざ北海道から迎えにくるのだから無理からぬことかも知れない。貯金があっても凍結されてしまった。兄弟一行六人では料金の下るのを待たざるを得ない。米一俵（六十キロ）六十五円の時代なので相当な金額であった。百円まで値下がりするまで待ちに待った。十月二十日夜陰に乗じて六十屯のボンボン船に乗り込むことが出来た。三十人乗船果たしてこんな小さな船で北海道へ行けるのか不安になって来た。亜庭湾を出る頃から波が高くなり甲板上にいる者は水をかぶり、船酔いして吐き出す者あり悲鳴が出始めた。

どうすることも出来なかったそのうちおとなしくなってきた。皆グッタリとして元気が無くなっていたのだ。船長さんも明け方までには境界線を越えなければならないのでかまってはいられなかったのでしょう。こうして十四時間、船は十月三日十時に稚内港に到着しました。青ざめた表情、水をかぶっての髪の毛の乱れも祖国について

安堵感から時間の経過と共に変化して行った様子は今でも脳裏に焼きついていきます。

稚内に上陸して引揚援護局の方々から暖かく迎えられ、一泊して翌十月四日上川町の叔父の家へ無事たどり着きました。手元に残った金はほんの僅か、幸い列車は無料の取扱いをしてくれました。当時の六人は現在元気であることを申し添えます。

戦後を生きぬいて

北海道 佐々木 ツワ

祖父母が樺太遠刈村字胡蝶別に住んで終戦の年で四十年ほどになっており、祖父は村の古老として誰からも親しまれていたのをおぼえています。私にとって本当に先祖の地を失ったのです。

八月十五日終戦を知り村中が絶望の極に至り地蔵堂に集まり自決も覚悟し合った。

婦女子と十五歳以下の男子は本州に渡ることと村役場

から連絡があり、食べ物と身の廻りの物を持てるだけ持って村の発動機船に送られて村を出発した。残った男の人達といつまでも声を限りの別れを惜しんだ。私達は傷痍軍人で両眼失明の二十五歳の弟と我が子二人祖母と母と妹達であった。

夕方に大泊港に着き無人になっていた番屋に泊まった。翌日から、朝になると引揚船のくるのを待って人の波に押され混雑の中を波止場に通った。

二十二日午後七時傷痍軍人とその家族を乗せて最後の引揚船となった連絡船に乗船出来た。失明の弟のお陰であった。残った人達は止むなくまた村へ戻っていった。私のすぐ下の妹も家族をつれ帰った。

出港して間もなく空が真っ赤に火の手が見える。真岡の町が焼けているのだと言っていた。船内では火の気は一切禁じられた。タバコも勿論であった。

先頭の船は機雷にふれ、後を走っていた船も沈没させられたと船内ニュースがあり、いつ同じ目に逢うかと全員生きた心地もなかった。ようやく稚内に着いたのは夜中の十二時近かった。木の葉のような船がぞくぞく入港